

白鵬35回目の優勝！！ だけではないぞ
(名古屋場所観戦雑記)

平成27年七月場所(名古屋場所)は、千秋楽の横綱決戦で優勝が決まると言う大変面白い展開となったが結果的に星ひとつの差で迎えた一番を制したのは白鵬だった。しかしながら、二場所連続休場した鶴竜がおおかたの予想を裏切って好調な土俵を見せてくれたのが大きな番狂わせでもあり、場所を盛り上げた貢献者でもあった。両横綱ともに安定した腰の構え、鋭い攻め、厳しい臨機応変の動きなどなどの点で他に比して郡を抜いている感じがした。白鵬の35回目の優勝は勿論前人未踏の記録ではあるが、ひとつひとつの取り組みの中を観察して見ると、「打倒白鵬」の念に燃える力士が増えて来ていることと、そのハードルが少しずつ下がってきていることを感じさせる場所だった。

今場所は、名古屋場所の15日間を通じて感じた各力士への感想を羅列して見ることにした。綱を腰に纏った力士にコメントを付けるのは「神をも恐れぬ行為」と言われかねないし、三役力士についてはしばしば記述の機会があるのでやめて、東西の平幕力士だけを対象にした。

<1> 東前頭

貴ノ岩は元横綱貴乃花が育てた初の関取と言って騒がれたが、いざテレビ機軸に登場したのを見て落胆の色を隠せない。新入幕は平成26年1月だが、幕内に入ると勝ち越せず十両に落ちてしまう。そして何場所かするとまた再入幕するがまた……。182cm 148Kg 文句の言いようのない体躯、勝つ時には腰の構えもよく力強いが、負ける時はぶつかり稽古のような無様な負け方をする。何が足りないのか良くわからないが、進歩が見えない力士の一人。名横綱とて名師匠とは成りえないということか。

新入幕の**青狼**は千秋楽に敗れて負け越しとなった。朝青龍とやや似た顔つきをしているので、恐らく典型的なモンゴル顔なのかもしれない。まだ相撲にむらがあって勝ち越しは無理だろうなと思って見ていたが……。

豊響は実直さを感じさせる突き押し一本の相撲。前半4勝1敗と絶好調を思わせたが、終わって見れば5勝10敗。押し相撲はツラ相撲の典型かそれともどこか故障をしたのか。

英乃海は青狼とともに新入幕、前半は基本を身に付けた正統派の相撲ぶりで期待を持たせたが、黒星が続くにつれて失速し、最後はもう相撲になっていなかった。新入幕の場所はこんなものなのだろう。

遠藤は怪我から立ち直り、復活を感じさせる取組が多かった。低い腰の構え、大きく踏み出す最初の一步、前傾姿勢ながら叩かれても落ちない安定性、素早い前ミツとりなど良さが戻ってきた。10勝5敗は好成績との評価にはなるが、大砂嵐、旭天鵬など負けるのが不思議な力士に負けたり、千代大龍・嘉風など突き押しや動きの速い力士に負けているのが気になった。来場所が本当に復活を評価できる場所なのかもしれない。

時天空はけれど相撲に徹している。きれいでない駆け引きだらけの立ち合い、やたらに使う張り手などやや目障りになってきた。またこうした相撲以外の日には粘り腰もなくあっさりと土俵を飛び出してしまう。顔つきだけは気迫を見せるが、実際の相撲内容には気迫は希薄で面白さがない。

北太樹は左四つの型を持っている主義主張がはっきりしている力士で面白い。脇を締めて土俵に向かって手首を返す投げには美しさもある。またきちんと腰を下して両手をついた立ち合いはフェアさを感じさせるし、早い反応ときびきびした動きは好感を感じさせる。5勝10敗は何か怪我の後遺症があるようだ。

佐田の富士は190cm 200Kg、体重は多すぎるように思うが、貴乃岩と同様に立派な体格を持っていながらそれを活かしてきれていない。この体を上手く使って突き押しに徹したら鬼に金棒だと思うが、そうならない。今場所は10勝5敗と立派な成績を上げたが、おそらく来場所は大きく負け越すに相違ない。この悪循環から抜け出すには、質の高い稽古で体を絞り込むべきと見ている。境川部屋には競争相手は沢山いる筈。

嘉風、前頭8枚目で12勝3敗。横綱大関と対戦しない地位ではあるが、十分に評価できる成績である。敗れた相手が佐田の富士・誉富士・大砂嵐なので、インパクトが強い突き押し相撲に弱いということなのかもしれない。両手をついたきれいな立ち合い、気迫みなぎる土俵、33歳まだまだやれそうな力士である。

玉鷲、中日まで3勝5敗では今場所は大きく負け越しかないとはいきや、後半盛り返して8勝7敗にこぎつけたのは立派。気迫のこもった突き押し一本の相撲は見ていて面白い。一昔前「気風（きっぷ）の良い相撲」という表現があったが、玉鷲が好調な時にはこの言葉がぴったりする。

旭秀鵬の相撲は日毎に場所毎にばらつきがある。相撲の型もはっきりせず、「何をやりたいのか」「何が自分の型なのか」が良く見えない。191cm 152Kgで柔らかさもある恵まれた体が泣いている力士の一人だが、このところ稽古が足りないせいか体ばかりが大きくなってしまっている。

隠岐の海は189cm 163Kg 柔らかな筋肉も併せて「大鵬の再来」と騒がれたこともあったが、相撲の内容はそれほどのレベルではない。ある日前裁きの良さを披露したかと思えば翌日はぼったり、ある日力強い前進相撲で勝ったかと思えば翌日は一方的に投げ飛ばされたりと不安定さが特徴だったが、何故か今場所は攻撃型の相撲が光り11勝4敗の好成績で来場所の三役復帰を確実にした。「来場所は4勝11敗だろうな」という心配がいつもつきまとう力士である。

安美錦はいつもサポーターだらけの体をしているので、古傷なのか新しい怪我なのかよくわからないが、今場所は精彩を欠き6勝9敗に終わった。体調不良でも前頭4枚目でこの星があげられるのはさすがだが、土俵際で自ら飛び出すような土俵の割り方をしているので、恐らく膝がだめなのだろうと感じた。飄々としてまた淡々と語るインタビューの受け答えは面白いのだが、今場所はその機会がなかった。安美錦の活躍が見られなかったのは残念だったが、照ノ富士の相撲の進歩の中に安美錦が指導する姿が見え隠れするので、若手指導にも尽力していると思われる人間像が浮かんでくる。

勢の今場所は、肩の故障が悪化している感じで全く相撲になっていなかったのも、コメントのしようもない。休場して治療に専念すべきだったのではないかな。

高安は初日に豪栄道に完勝して「今場所はやりそうだな」と期待をしたのだが、二日目以降の相撲を見て「豪栄道が駄目だった」のが実際の所だった。そして、高安自身の相撲は、あっちへフラフラこっちへフラフラの不安定な場所で6勝しかあげられなかった。

栃の心は、平成25年夏に右ひざ靭帯断裂の大怪我をして長期休場となり幕下50枚目台まで陥落してしまった。そこからの復帰のプロセスの中で再び下位優勝を経験したので、「幕下優勝二回・十両優勝三回」というめずらしい経歴になった。肩に力が入った力任せの相撲で突っ走ってきたが、この大怪我の後基本に忠実な「腰を下して脇を固めて前進を前提にした寄り身」に拘るようになり、復活を遂げながら「新しい栃の心」を再構築した。東前頭筆頭で8勝7敗、来場所は久しぶりに三役に復帰しそうな感じがする。

<2>西前頭

里山と言う名の響きからすると山国の出かと思いきや、奄美大島出身で本名が里山。176cm 121Kgは相撲界では小兵の部類に属す。今や普通の人で176cm位の人にはざらにいるようになったので恐らく髷を結っていなかったらすれ違っても気が付かないかもしれない。立ち合いは誰よりも低く、素早く相手のまわしに食いついて手を離さないばかりか、じわじわと下から下からと攻め崩して行く相撲は、相手の体重を前進で受け続ける形になるのでかなりの運動量になると思う。昭和40年代ぐらいに活躍した岩風角太郎を彷彿とさせる。「こう言う力士がいるから相撲が面白いのだ」と叫びたくなる。幕尻で5勝10敗、再び十両に落ちることになるがいつの日にか幕内上位で相撲をとらせてみたい力士である。

鏡桜も幕尻周辺と十両上位との間を往復しているエレベーター力士の一人だが、ようやく9勝6敗と勝ち越しができた。元横綱柏戸が興した鏡山部屋の所属で、この部屋は元関脇多賀竜が後を継いだ。鏡桜のきれいな前裁きと上手さを感じる四つ相撲は多賀竜の現役時代と良く似ている。こういう相撲を15日間取り続けられれば良いのと思うが、なかなかそうはならない。

千代大龍は久しぶりに快進撃かと思われた前半戦だったが、怪我の為12日目から休場し、せっかく勝ち越しをしていたながらも線香花火状態になった。激しいぶちかまし、休みなく繰り返される突き押し、これが出ない時には惨めな負け方というパターンが繰り返されている。

琴勇輝の最大の問題点は立ち合いにある。相手との呼吸は一切無視して自分の突き押し相撲の成就だけしか考えていない。時間一杯になっても腰を下さない中腰の睨みあい、土俵を軽く掠る程度のチョン着きの立ち

合いがすべて。呼吸が合わず仕切り直しになると深々と頭を下げて謝罪のポーズをするが、自分の立ち合いのスタイルは変えない。時間一杯の時の雄叫びとともに止めて貰いたい。師匠の指導力が疑われる力士。

旭天鵬については余計な解説は不要だと思う。40歳まで続けられたことが驚きでもあり称賛に値する。白鵬の優勝インタビューで、本人の正式発表前に「旭天鵬関が引退・・・」と口を滑らしてしまったのは笑えた。モンゴルから来た力士達の結束の固さを物語っている一幕だった。十両に落ちて何場所かになる若の里も引退することになり、時代の節目を感じさせる場所になった。

阿夢露はここ数場所で相撲の基本をしっかりと身につけて相撲ぶりに進歩が感じられた。低い姿勢からまわしを掴んで、前進しながら下から攻めて行く型が目立った。前みつや浅い上手の引き方、腰の寄せ方などが確実に自分のものになっており、今後が期待できる。こう言う人に敢闘賞をやるべきだと思うが・・・。

誉富士はようやく幕内に定着してきた感じではあるが、勝ち越しは叶わなかった。腰の下りた重い押し相撲は見ていると、津軽相撲の粘りを感じる。「腕をクロスした立ち合い」は、その昔琴ヶ浜が両差しを狙う目的でやっていたが、誉富士の場合は押し相撲。

大砂嵐が幕内に登場した頃に「こんな相撲では怪我で寿命を縮めるに違いない」とみていたが予想通りの怪我続きになってきた。肩の故障で腕が使えない状態で奮闘していたが、途中から下位の頃を取っていた格闘技まがいの相撲が再来し11勝4敗とは言えあまり価値の見いだせない今場所だった。

豊ノ島もそろそろ力尽きたかと強く感じさせる前半戦1勝7敗の出来映え。横綱・大関と合わない地位にも関わらずこれでは・・・と心配したが、何と後半戦を6勝1敗で盛り返したのはさすが豊ノ島。

臥牙丸の勝ち相撲は体重を利した前進相撲だけ。その型を許してもらえた時にしか勝つことができない。少しづつまわしを引いた時の相撲を覚えて来た感じはあるが、まだまだという印象。前頭6枚目で6勝9敗は良い出来の内にいる。四股名に美しさが無い力士の代表格で、名付けてくれた師匠の感性が気になる。

徳勝龍は前頭上位に定着しつつあるが、今場所の勝ち越しはならなかった。時間一杯になってから相手との呼吸合わせがうまくできないのは、腰を割って両手をついて立ち合いに入る動作が中途半端なのが原因。

豪風は5勝10敗。里山よりも背が低い171cm、国技館ですれ違ったことがあるが目の高さが合ってしまう高さで驚いた。安美錦とともに旭天鵬・若の里なき後を押さえる重鎮になってきた。年齢を感じさせない相撲が魅力だが、今場所は光り輝かずに終わってしまった。

魁聖の相撲が先々場所あたりから変化してきた。まわしが引けようが引けまいがかまわず前進し、相手に圧力をかけながら勝機をうかがう相撲が数多く見られるようになってきた。この相撲ならば194cm 192Kgの体がいきるし、脚が長いせいでやや腰高なのが補正できる。今場所はさらに浅い位置のまわしを取ることも覚えて来たようで、前頭3枚目での6勝9敗は成果ありと言えるのかもしれない。

碧山は自分より下位の力士に負けたのは大砂嵐戦だけで、前頭2枚目での8勝7敗は力を付けて来たと言える。体ごと前進して来て、あの太い腕を繰り出しての突き押しが自分の勝ちパターンであることがわかってきたようだ。怪我のせいで蹲踞の姿勢にも支障がある程度の膝、腰が曲がらず割れることがない、この状態では相手を良く見ながらの前進相撲が唯一の勝ち方だろう。

佐田の海は、本人がどう思っているのかは別として、マスコミが騒ぐ「親子二代・・・」という鳴り物が煩い感じがする。前裁きは良いし、スピードがあり、臨機応変の動きが出来て、土俵際の粘りもあるが、下がりながら相撲を取る悪い癖があり、マスコミが騒ぐほどの逸材の道を進む前に怪我を心配せざるをえない。前頭筆頭まで躍進したが、このコメントがまさに「壁」なのだろうと思う。

<3>物言いに物言い

物言いが付く取り組みが多かったが、「物言い」の動作に入るのが遅いケースが目立った。行司と勝ち力士が勝ち名乗りの動作に入ってから審判員が手を上げるのはおかしい。おまけに審判員が手を挙げたことがはっきりとは見えない観客にとっては、何が起きたのかさっぱりわからないので会場がざわつく。もっと素早くわかりやすく「物言い」の意志表示をすべきと感じる場面がいくつかあった。審判員が手を上げると赤い表示灯が点灯するような仕組みも必要ではないか。

結果的に行司の差し違いとなるケースが目立ったが、果たして行司に責任があるのかなと首をかしげること

が多い。「行司の審判に審判員が異議を唱える」という仕組みよりも、「行司と審判員の合議による審判」という位置付けにした方が良いのではないかと感じる。

物言いが付いて審判員が土俵上に上がると、審判長がビデオ室と連絡を取り合って映像による判断情報を聞くが、その画像を審判長が見ている訳ではない。技術が進歩した時代なので、審判員または審判長に携帯端末を持たせて直接画像を確認するぐらいの仕組みはできないだろうか。

この間、観客は蚊帳の外に置かれてしまう。テレビ機材では放送局がビデオ画像を流すので事のあらましはわかるが、会場の観客には何も情報がない。館内に大型ディスプレイを設置して観客席に情報提供することも必要ではないか。

土俵上の協議の結果は審判長がマイクを通じて館内に説明をする。審判長の「説明能力」による波紋の広がりには避けられない。勝ち力士の名前を言えずに口ごもる審判長や、しどろもどろの語り口の審判長がいるのは信じがたい光景だった。藤島親方（元大関武双山）の説明は明瞭でわかりやすい説明が多かった。

<4>NHKにひとこと

NHKの相撲中継を利用してテレビ観戦をしているが、永年見続けていると色々なことに気が付く。

昔と比較することが必ずしも良いこととは限らないがどうしても気になることがいくつかある。

アナウンサーが解説者（放送室と機材席に一人ずつ）の力を借りながら実況中継を引っ張る訳だが、アナウンサーと解説者との間の会話だけが深度を増して、テレビ機材の観客に聞かせていると言うことを忘れてることが多い。アナウンサーはカメラを向いて喋ることで観客に聞かせるのが普通だが、二人だけの会話に突っ走っていることが多くなってきた。朝のモーニングショー的な番組に見られる「スタジオだけが勝手に盛り上がっている」と良く似ているような気がする。

北の富士・舞の海などのレギュラー解説者の日は良いが、色々な親方（元力士）が登場する時に「聴きたくない実況中継」と感じることもある。玉の井（元栃東）を筆頭にボソボソ声でひとり言のような解説をする人や、引退したばかりの「新人親方」など解説者としての素養がなさそうな人が登場するともう迷惑になって来る。「解説者」としての喋り方、アナウンサーとの応答のしかた、はたまた人前で喋るための基本事項などについてきちんと教育してから起用するべきだと思う。

時々ゲストまたはゲスト解説者等で異分野の人（特に芸能界が多いが）が出てくるともうテレビを消したくなる。その芸能人の紹介に頻繁に時間が取られたり、予習不足の低レベルのゲストのコメントや、通ぶった饒舌なしゃべくりは迷惑の域に入る。

その日のゲストやゲスト解説者や新人年寄りによる解説の日などは、その人の過去の土俵を紹介する時間がやたらに多くとられて、本来の取組の中継に影響が出ていると感じることが多い。また、後半戦になり優勝戦線に影響がありそうな取組や人気力士同士の取組がある日には、過去のビデオを持ちだしたりして途中でやたらにそのことをばかりを騒ぎ立てる。「まずは目の前の取組みに集中せよ」と言いたい。

勝ち越し力士や殊勲の星を上げた力士はインタビュールームに呼ばれてアナウンサーのインタビューを受けるが、インタビュー技術が稚拙でつまらないことが多い。「こんなこと聞いてもしょうがないだろう」と思うようなことや、「そんなことを聞いてどうなるの?」と思うようなインタビューが時々見られる。

また「安美錦・旭天鵬・豊ノ島などのように自発的に判り易く話してくれる力士は問題がないが、殆どの力士は「一日一番、自分の相撲を取り切るだけです」という定型の応答のしかたしかしない。そこで「何か別のものを引き出す術」がインタビュー技術として必要になってくる。また、一般の番組でも多くなってきたが、最初からカメラを両目に合わせておいて、わざと落涙を誘う質問をするなどわざとらしいシーン作りも見えてつまらない。

いずれにせよNHKが中継放送を独占している以上、その質を高めるも低めるもNHK次第なので、改善努力を続けて貰いたいと思っている。

以上